



# 風狂

第64号

風狂の会

【詩】

朴先生の神業

高 裕香

根こそぎ

なべくらますみ

詩人の旅立ち

高村 昌憲

ペンギンの島

長尾 雅樹

鬼の子

富永 たか子

登呂遺跡

出雲 筑三

模範囚

原 詩夏至

【風狂ギャラリー】

三浦逸雄の世界（四十八）

三浦 逸雄

【エッセイ】

北岡善寿先生の思い出

神宮 清志

昭和は遠くなりにはけり？（7）

高島 りみこ

【童話】

パンケとペンケ

宿谷 志郎

【翻訳】

アラン『芸術論集』（三）

高村 昌憲 訳

執筆者のプロフィール(五十音順)

好青年の彼は何者だ！  
彼が教室に入ると  
さっと、空気が変わる。

熱い眼差しで児童を凝視し  
心をつなぎ留める  
張りつめた青い空気が覆う。

決して、怒鳴る事はない。  
目でものを言い  
目線で活を入れる。

四十分の授業の間  
児童達は、  
吸い込まれたようになる。

おしゃべりも許されない  
魔法にかけられた様に  
皆、彼の心の中にいるのだ。

凜猛な台風の日から一ヶ月近くが過ぎたのに  
河原の傷跡は癒えない

あの大木は杉か  
水草や自分のものではないはずの枯れ枝まで絡ませて  
根っこごとひっくり返っている  
上流から流されて来たのでもない

河原に立っていたあの木  
鳥の声を響かせて立っていたあの木  
木は川砂混じりの毛根まで見せて倒れている  
この木だけではなく  
少し先の河原にも枯れ始めた木の根を見せて  
倒れている大木

河原に触れた枝の先には  
ビニール袋のようなものが絡まって  
かすかな風に揺れる  
この枝の先から芽が吹いて とか  
絡まった根の先から新しい根っ子が出て とか  
そんな事はあるのだろうか

出て来てほしい

大嘘をつく詩人でなければならない  
そんな言葉を残して詩人は旅立った  
酷く暑かったと思うが思い出せない  
未だに現実のこととは思えなかった

何故なら会えば何時でも話が好きで  
何時までも話題が尽きなかったから  
これからも再びお会い出来るようで  
気さくな楽しい話が続くようだから

本当にこれで予定を書けなくなって  
会えなくなるなんてつまらないのだ  
本当にこれでお会い出来なくなって  
一緒に焼酎を飲んで楽しめないのだ

実父と一緒に飲んだ記憶が無いから  
つつい甘えていたのかも知れない  
その代わりに創作の場を作ったから  
親孝行された気分でしたなら嬉しい

出来れば又大嘘をつく詩人になって  
存在し得ない直線を表現して欲しい  
出来れば又焼酎を飲む父親になって  
隠れた真理を話し続けていて欲しい

直立した歩行姿勢で  
氷の地平線を翔んでゆく  
白と黒の陰影を探して  
軽やかに移動する足跡から  
時計仕掛けの歩幅が虚空を滑る

ペンギンの棲んでいる島から  
騒々しく聞こえてくる叫び声  
寒風吹きすさぶ氷原の彼方に  
おうとつの夢の破片が散る

小刻みの間隔で  
歩き廻り走り廻る道化師の風音が遠ざかり  
海に潜った瞬時の絵姿が消える  
水鏡に写った生命の旋律を辿って  
空の彼方に伝播された鼓動を聞く  
氷上に戯れている夢ごちの歩行者たちに  
凍土の季節が荒れ狂うこともある

生きるということの影絵を刻み  
極楽の手法を映し出して行く南極圏  
ここに生きている無邪気な動物を追い  
瞼の奥で残像を描き続けながら  
生きることの楽しみを無心に繰返している

万年氷の寒冷地帯に  
生の楽園を刻印しながら  
優しい記憶を体内に宿して  
軽やかな天界の呼吸を白く染め上げて  
キョトキョトと仲間に挨拶をしながら  
いつまでも生の極みを演じ続けている

あの鳴き声の向こうに何があるのだろう

氷島は死の樂園を模写しながら  
一羽一羽の生死を忘れ去ろうとする。

鬼の子の

見送るだけの無人駅に佇つ

だれと話すでもなく

本を読むとか

書きものでも思つても

その気になれず

あっちを向いても

こっちを向いても

吹いているのか

いないのか

鬼の子はゆれて

父や母が

そのまた父や母が

してきたように

田は黄色に

畑の小豆は出番を待つ

晩秋の相模っ原

久しく途絶え

たまさかに目が合った鬼の子

生涯をミノの中で過ごすメス

視力のないオスはミノを出て

そのまま果てるという「蓑の虫」

寂しいね

こころに暇がありすぎて

だれかを呼んで

季節に溶けていく

今から約千九百年前  
バケツ千杯の雨が降った  
はるか弥生時代であった

川という川は荒れ狂い  
山という山は崩れ  
登呂周辺の集落はほぼ流出した

最近 進化した元素同位体分析で  
三千ミリの雨が降ったこと  
雨は四百年周期で降ることが解った

彼らは山や海を神と敬い  
自然界と一身一体となって  
慎ましく暮らしていた

弥生人は  
資源を循環し再生し  
恵みに対しひたすら従順だった

一体どなた様が  
あんなに雨を  
運んでくるのでしょうか

最近の気象史では  
前回の豪雨は千七百八年  
次の予測は二千百年となる

だが予測より早く  
既にその兆候はでている  
しかし声をあげる勇者は少女だけ

一体どなた様が  
あんなに資源を

使い捨てにするのでしよう

地球には摂理がある

警告を知りつつ

利権を求めていく政治

ポンペイの豪族は酒宴を開いていた

ベスビアス火山は

噴火しているというのに

それは決して暗愚ではない

ここで逃げたら

卑怯者として恥をさらす

一体どなた様が

猛り狂う水と列強の争いを

治めると言えるのでしよう

どうにもならない落日の坂

くよくよするより

酒を食らって耳を塞ぐしかない

そいつは  
たった一人の  
小さな  
工事現場で  
背中を見せていた。

汚れたTシャツに  
白抜きで  
大きく  
「模範囚」と  
書いてある。

たぶん  
誰かが  
洒落で作った  
Tシャツなのだろう。  
(なかなかいいセンスだ。)  
だが  
非番の  
(または仕事にありつけなかった)

ある日  
ある街角で  
そのシャツに眼をとめ  
ぼーっと立ち尽くして  
暫く考え  
遂には自分のものにしてしまった  
(わざわざ金を出して)

そいつの胸中を  
その時よぎったのが  
ホワイト・ユーモアか  
ブラック・ユーモアか  
それともはやユーモアとは呼べない  
名状不能の何かだったのか

言い当てる自信は  
俺には  
どうやらない。

だって  
大きく  
「模範囚」と貼り付けた  
（自分が？  
それとも  
見えない〈何か〉が？）

泥にまみれた  
そいつの背中は  
重く疲れて  
陰気にうなだれて――

少なくとも  
少しも  
笑ってなどなかったのだ。

「話しかけるな」  
背中には言っていた。  
俺は  
反対側に回って  
せめて  
そいつの顔を見たかったが  
結局  
それすら出来ずに  
歩み去った。

そっとしておこう  
でないと  
こいつは  
これ以上  
もう  
「模範囚」では  
いられなくなるだろう――

そう  
力なく  
自分に言い聞かせて。

いられなくなった  
その先が  
〈脱獄〉か  
(だが、どこへの?)

それとも  
元の木阿弥の  
〈犯罪〉か  
(だが、何への?)

誰にも  
知るよすがは  
ないのだが。



三浦 逸雄 「午後の光」 8号（アクリル・紙）2019

「だいたいねえ、高等遊民という思想がないんだから困るよお、キミイ！」荻窪に下宿していた独身の北岡先生が酔って挙げた怪気炎の一つである。昼間から酔って、なんとなくまじめに働いていたり、学んだりしている連中をくさしたくなる時はある。あの頃の北岡氏は毎日がそんな調子だった。無頼漢のイメージにぴったりだった。高等遊民とはけだし名言ではないか。爾来「高等遊民」という言葉が気に入り、そんな人物になりたいと思ったりしてきた。しかしそれは無理な話で、高等遊民と言える人物には、その後二人しか会うことはなかった。その一人は北岡先生その人だった。

その頃わたしは高校の定時制、つまり夜学に通っていた。一学年が一クラスで、四年間同じ担任だった。それが英語を教えている北岡先生だった。わたしは昼間働いていたけれど、臨時工のような仕事が多く、しばしば失業した。その都度学徒援護会などで仕事を探さなければならない。朝から千代田区九段の学徒援護会に行って仕事にありつこうとするけれど、だいたいは数日かかる。この数日は午後になると暇が出来てしまって、虚しいことおびただしい。するとなんとなく足が荻窪に向かってしまうのだった。六畳の下宿を訪ねると、たちまち酒が出て来た。まだ高校二年のわたしに「今から練習しておけば間違いない」と勧めた。

その頃学校では「あの神宮はまだ少年の域を出ていない」とほかの生徒に言っていたのだから、少年に酒を勧めていたことになる。酒の効用は大変なもので、たちまち天下を取ったような気分になれるのだ。そこで夕方まで過ごすと、陶然とおぼつかない足取りで学校へ行く。英語の時間になると「三人称単数現在を三単現と言って、動詞にはエスを付ける」などと真面目に教えてくださるのだった。四年になって英語の教材にラフカディオ・ハーンの「怪談」が使われていた。その講義は印象深く覚えている。物語の主人公が恐ろしいものに出会って逃げてくると、屋台に提灯を下げた蕎麦屋が居て、いま怖いものを見たというと、「あなたが見たのはこれでしょう」と言って、顔を一撫でするとノッペラボウになった。この場面を先生は面白い顔をして演じて見せた。今思うと達者な演技だったと思う。

その頃の夜学生の間では、文学が愛好されていて、定期的に文芸誌が発行されていた。その中に奇怪な詩を書く男が居た。その詩は高く評価されており、ダダイストの詩人として名高い高橋新吉に、自分の主宰する詩誌「時間」の同人になるよう勧められていた。彼の詩は、わたしには全くちんぷんかんぷんだった。

先生の下宿の壁に四行の詩を半紙に墨で書いたものが貼ってあった。それは西脇順三郎の「旅人かへらず」の中の一節だった。

三寸程の土のパイプをくはえた

どら聲の抒情詩人

「夕暮れのやうな宝石」

と云ってラムネの玉を女にくれた

この詩もわたしには理解いたしかねた。ところが不思議なことに、ある日あるときこの詩が急に  
見えてきて惹きこまれた。すぐに古書店に行って「西脇順三郎詩集」を買ってきて読んだ。たち  
まち夢中になった。するとほかの詩が詩でないように見えてきた。これがほんとうの詩なんだと  
思えた。文芸誌に載ったクラスメイトの、それまで奇怪な詩だと思っていた詩も、よく理解でき  
るようになった。

北岡先生の部屋に居て、酔うにつれて無頼的な気分が高揚し、浮世離れした言葉の連続に浸って  
いるうちに、ふいとこの詩の面白さの虜になってしまったのだ。西脇順三郎の弟子と称しておら  
れたので、自然とその世界に這入って行ってしまった感がある。この半紙に墨書した詩は、西脇  
順三郎自身の書だと思い込んでいたが、じつは北岡先生の書だと分かったのはごくごく最近のこ  
とだ。西脇順三郎の真筆は色紙にペンで書いたもので、晩年の北岡先生のベッドサイドの壁に額  
装して飾ってあった。

北岡先生の言葉に関する感覚には、一風変わったものがあった。酒の席で誰かが牛乳を飲みたい  
と言うと、「牛乳なんて土人の飲むものだ」と言い放った者が居た。これに激昂して「土人とは  
なんだ！」と険悪な雰囲気になると、北岡先生が言った。「土人？すごいじゃないか。土人こそ  
本当の人間だ。土人が一番いいんだ。土人を尊敬できないようでは駄目だよ」。これですっかり  
和やかになってしまった。あるとき「ドンブリ勘定」と言ったら、この言葉が気に入ってドンブ  
リ勘定が一番だ。ドンブリ勘定に限る、と称賛してやまなかった。こうした土俗的といったよう  
な言葉に、限らない愛着をもっておられた。

わたしは能面の個展を四回開いたけれど、必ず先生は来てくださった。あるとき一人の人が古び  
を付けた能面を、何百年も前のものをコレクトして展示していると勘違いした。いやこれはすべ  
て自作で古びを付けていると説明すると「作為的なことをする」と、やや侮蔑的に言った。これ  
に対して適当な答えが見つからず、うやむやのまま帰ってしまった。そのすぐ後に北岡先生が見  
えたので、そのことを告げると先生は言った。「作為的さ。何だって作為的なんだ。作為的でな  
いものはない。作為的でなければ、何も出来ないではないか」。この言葉にすっかり自信を取り  
戻すことが出来た。有難い後押しだった。

こうした言葉の連続と特有の雰囲気は、独身時代とその後とまったく変わっていない。九〇歳を  
過ぎて、とあるサービス付き高齢者向け住宅の一室にお邪魔してお喋りしたときも、まさに荻窪  
の下宿の続きのようだった。二〇代にして出来上がっていたのだろうか。独身の二〇代といっ  
ても青臭い感じはまったくなかった。軍隊経験がそうさせたのか、よく分からないが、ある種の大人になり切っておられた。そこに一本の太い丸太ん棒が転がっているような、妙な安定感とふてぶてしさがあった。

われわれ高校生に酒は教えてくれたけれど、女についての教育は一切なかった。あるとき先生の  
友人と一緒にあったとき「女の話はしないのか？そうか、でもあれはその方でもすごいんだぜ」  
という言葉聞いた。結婚が話題になったとき先生は言った。「おれはピュッと捉まえちまう  
んだ」そう言いつつ人の顔を覗き込むようにした。その目は笑っていた。

そのピュッと捉まえた女性が素晴らしかった。デパートガールの中でも、とりわけ上等な女性を

捉まえて見せた。その後はスチュワーデスが上等女性の代表のようになっていったが、その頃はデパートガールこそ一番だった。その中でも先生の捉まえたひとは、ルックスといいスタイルといい、あまりに申し分なくて、これだけのひとはわたしの生涯に三人と会っていない。稀とも見えるこの美人は気の強いひとで、酔っぱらった北岡氏をグワングワン怒鳴りまくって一向に取まらない場面に遭遇したことがある。先生は酔っぱらっていて何も覚えておられないだろうが、そのときの応答が笑えた。「おれはハイカラな男なんだから」とか「そんなものポンポンと壊してしまえ」と本気で怒っている相手を、からかって楽しんでいるようだった。

ずっと後に小金井のご自宅を訪れたときは、奥様はわたしのことなど全く覚えておられず、「この人に英語を教わったの？」と何度も訊いておられた。かなり疑いの目をもっておられたようだ。とても恩師と教え子の関係には見えなかったのであろうか。缶ビールを飲んで、五本ほど空になると、この奥様はいつものことのように叱りつけておられた。北岡氏の健康を心配されて、親が息子を叱っている趣きがあった。

先生はまた岳人であり、釣り師でもあった。山登りについては、冬山も登っておられたから、相当な岳人だったに違いない。先生の詩の中で釣りを詠んだものがあって、これは魚野川に違いないと思って、後に尋ねてみるとやはり魚野川であった。魚野川は新潟県の魚沼に流れる川で、わたしも何度かそこで釣りをしたことがある。河原で半分水に浸かったような石を持ち上げると、石の裏にヒルが居る。そこに指を近づけるとヒルが吸い付いてくる。これを釣り針に通して川に投げ込む。浮きは付けず錘だけ付けて、流れの少ない深いところに入れて、川底に近付いたころ合いに、ビビット強烈に糸を引いてきた。先生はこんな釣り方をされたか知らないが、その後はよく酒匂川の河口付近に行かれたらしい。小田原に近いところまで、自家用車を駆って出かけておられた。それが八〇歳代の後半まで楽しんでおられたのだから、その抜群の体力には恐れ入る。スピード違反で捕まってよく罰金を取られた、と嘆いておられた。八八歳で免許証を返納されているが、衰えたからではなく、それまで住んでいた小金井から西八王子に引っ越すとき、駐車場を確保できないので運転をやめたのであった。

この恩師が最高の持ち味を発揮されたのは、わたしが狂気に囚われた時だ。一年間療養して娑婆に戻ってきた。アイツは気が狂ったという情報が広がる。こういうとき人は相手にしてくれないものだ。ムシヨ帰り以上に近付いてくれない。何と話しかけたらいいか分からない、まずはそんなところから敬遠しておこうということになる。北岡先生を訪ねると、まったく普通に話しかけてきた。「刺激を受ければ誰でもそうなる」病気に関してはそれだけだった。あとは以前通りの酒と談論になって、心弾むような時間が過ぎていった。この瞬間、わたしは助かったと思った。これでいいんだと思えた。

その後山岸外史という評論家を訪ねた。山岸さんはすぐ近くに住んでいたのでよく遊びに行っていた。太宰治の書簡集を見ると、山岸外史との書簡が飛び抜けて多い。親友だったのだ。「そうか。そうだったのか。よく精神病院まで行った。今の世の中で明るく生きているなんてどうかしているのだ。それだけ君が良心的だったということなんだ。よくやった！よくやった！」

この太宰治の親友は、わたしを抱きしめんばかりだった。

奇しくも無頼派ともいえる二人の文学者によって、わたしは救われたといえる。

一九八六（昭和六十一）年十二月から始まったバブル景気だが、前年の一九八五年の夏には「日航ジャンボ機墜落事故」が起きている。お盆真っ只中の八月十二日、羽田空港から伊丹空港に向かっていた日本航空一二三便が突如レーダーから姿を消し、群馬県の御巢鷹山で墜落しているのが発見されたという日本の航空史上最悪の事故である。乗客、乗員五二四名のうち五二〇名が死亡、四名の生存者がいた。事故後のバラバラになった機体の写真を見ると、四名が生存していたということ自体が奇跡に近いことのようにも思える。のちに私はロッククライミングで長野県の小川山に通うことになるが、県境に位置する御巢鷹山と小川山が近いため、事故直後は小川山付近でも現場を特定するために、かなりの数のヘリコプターが飛び交っていたという話をベテランのクライマーから聞いている。先鋭的なクライマーの中には報道機関からの依頼を受けて、獣道すらない現場に向かう案内をした者もいたという。

話をバブル景気に戻そう。それはあぶく銭の夢のような時代。あのような好景気の時代が再び日本にやってくることはないだろう。仕事はいくらでもあったし、働けば働くほど儲かった。今、この令和のような「働けど働けど我が暮らし楽にならず」とは雲泥の差である。年金は六十歳から支給されるものだと思っていたし、まさか国から「老後のために少なくともひとり二千万円貯蓄しろ」と言われる日が来るなどとは、想像だにできなかった。

バブル期のある年の会社の年始参りでは、車の整備と販売をしている取引先に立ち寄り、「じゃあ、車でも買っていくか」とママチャリでも買う感覚でスバルのレガシーを購入した。

印刷組合の忘年会だか新年会だったか失念してしまったが、こちらも凄かった。中小企業のオヤジたちに混じって私もお相伴にあずかったが、一流ホテルのただっ広い会場で、飲み物は十人以上のドレス姿のコンパニオンのお姉さんが運んでくれる。アルコール類はワインもあったかもしれないが、未だウイスキーの水割りが主流でコップにはなぜか紙ナプキンが巻かれていた。国産ウイスキーといえば通称だるま、「サントリーオールド」がナンバーワンだったが、今ではその座を「山崎」に受け渡している。宴会の会場内にはステーキを焼く屋台や、職人が鮭を握ってくれる屋台などが建ち並び、アイスクリームの上に温めたアメリカンチェリーのソースがかかっている、なんて小洒落たスイーツを初めて食べたのもこの時だ。会の終盤、売出し中の演歌歌手が振り袖姿で登場すると、オヤジたちの熱気は一気に頂点に達する。私の父もオヤジのひとりだから、テンション上げ上げである。歌い終わるとオヤジたちはご祝儀を渡すのだが、どのようにするかというと、割り箸に一万円札を挟んで彼女の胸元に差し込むのである。こちとら金はあるんだあ〜、文句あんのかあ〜の品のなさよ……。今思い返すと、この品性のなさは何かに似ている……。と思ったら第二次安倍政権だ。日本の中では「超々」がつくほどのハイソサエティな方々なのだろうが、どう見ても中小企業のオヤジ（註：この場合のオヤジは性別に関係ありません。オバサンオヤジという種族もいるのですぞ）である。あくまでも私見ですよ、私見。

この大宴会も令和の今となっては哀しいほど小さくなった。会場は公共の施設でコンパニオンは……もういない。

私生活でもバブルはブクブクと膨らんでいた。会社の近くにガラス食器専門の店があって、ある日通りかかると、ウィンドウに飾られているシャンパングラスに目が留まった。カラーの花のように上向きの円錐形で、台座の部分には翼を拡げた鳥がついていた。一個四千円。迷わず二個買い求めた。普段使いでビールを飲むときにも使っていた。お気に入りのものほどよく壊れるもので、呆気なく壊れ、買い足し、また壊れては買い足したが、バブル崩壊と共に買い足すこともなくなり今は一個も残っていない。

当時は高円寺駅近くのオンボロアパートに住んでいたのだが、景気上昇の勢いに乗って周りのアパートは次々と立派なビルへと建て替わっていった。そのビルの一角に渋い木戸づくりの居酒屋が開店。さっそく友人たちと立ち寄ってみると、店の中は土間になっていて本物の土が敷き詰められ、ししおどしが置かれていた。品書きには日本酒一杯八百円と書いてある。人数分を注文すると店の主人が小ぶりの盃と四合瓶を持ってやってきて、それぞれの盃に注ぐと瓶を持って行ってしまった。たったこれだけで一杯八百円……。私たちは手をつけるのも忘れて、しばし盃を見つめていた。その店も高円寺という庶民的な街に合わなかったためか、バブル崩壊と共に姿を消した。

昨今の若者たちの一大イベントといえば何とんでもハロウィンだが、この頃は専らクリスマスが一年のうちの最大イベントで、恋人同士がクリスマスイブにオシャレなシティホテルで一夜を過ごすというのが彼ら必須過ごし方であった。ホテルはどこも満室、この頃流行った山下達郎の「♪きっと君は来ない～ ひとりきりのクリスマス～」なんて状況は当時の若者にとって最悪なのだったのだ。

そしてバブル真っ只中の一九八九年の年明け、昭和は六十四年の幕を降ろすこととなる。（続く）



## パンケとペンケ（十一）

ペンケの里のはずれに、ゆるやかな流れのところがあって向こうの岸までヒモをはった渡し場がある。

木をくりぬいたり、木の骨に皮をはったりした舟を浮かべ、渡しでは口（艚）でこぐのではなく、両岸に渡したひもを引っばって舟を進める。

ウサル川の下流まで物を運ぶこともある。

この舟は、なんと神力で空も飛べる。それは昔から信じられていて、人は荷を運ぶが、神々は空を飛んで自らを運ぶ・・・まあヒゲおやじ、いやハリガネムシの神様のうんちくだが、あれこれ騒がれる謎の飛行物体とはこの舟のことらしい。

パンケちゃんたちは舟の飛行機で空中探検をすることになった。

行ったこと、見たことのない北のほうに行きたい・・・これがふたりの望み。

三階滝を見おろしながら北へ北へとゆっくりと飛んで行く。

目の前に大きな山が見えてきた。里とは違うひろびろと雄大なながめだ。「あ、マツカリヌプリじゃないか」「キレイねえ、パンケ兄ちゃん海も見えるよ」舟の上で大はしゃぎ。

マツカリヌプリをとり巻くように流れる川も光っている。

するとハリガネムシの神様がひとくさり。

「マツ（うしろ）カリ（～を回る）ペツ（川）の水源のあるヌプリ（山）のことじゃ。またシリへ（後方）シ（羊蹄）ヌプリともいう。シはギシギシというスカンポ（スイバ）に似た草のことじゃな。羊とは関係ないぞ。そんなわけで川はシリヘシペツ（後方羊蹄川=尻別川）じゃ」難しいので、いつしか羊蹄山になったみたいだ。

パンケちゃんたちはぜんぜん聞いてない。僕だけがこんがらがって頭を抱えていた。

でもキレイな何とも雄大な景色だ。

\* ギシギシ・・・日本中どこにもある草（タデ科・ギシギシ属）。和名：羊蹄。生薬名：羊蹄根。便秘、動脈硬化、インキン・タムシ、円形脱毛症に薬効。



## パンケとペンケ（十二）

夢の中で、パンケちゃんとペンケちゃんに誘われて、僕はパンケの里の西の小高い山の上から里を眺めた。

200年前の里の様子が手に取るようにわかる。

ウサル川の上手から5つのチセが並び、焼き物の窯場、パンケの湯、そしてクマのオリも見える。イヨマンテ（クマ送りの祭り）をやった空き地には祭壇があり、里の人たちが何かとふれあう大きなあずま屋のようなものがあり、太い丸太で作られたシャチ（とりで）が見える。

さらに下手には狩のために弓の訓練をしたり、子どもたちが思いっきり遊べる広場がある。

パンケの渡しには、あの木と皮の舟がつながれている。

小さな里だなあと思っているとハリガネムシの神様の声が聞こえた。

「みんなこの里もこのくらいのものじゃ。となりの里とは2里（7～8キロメートル）ほど離れていてな、たがいに縄張りがある。ふだんはこの縄張りをおかさず、山の生き物、川のチェプなど、暮らしの糧を守りおだやかに暮らしておる」

もっと上流にも里があるんですか？・・・いや、この奥は神だけが住む神域でな。パンケの里の者もペンケの里の者も「神の住むところ」として敬っておる。と教えてくれた。

パンケの里からも、ペンケの里からもそれぞれ峠をこえて海にいたる山道があつてな、峠から向こうは海辺のコタンの縄張りになるのじゃ。・・・という話だった。（つづく）



## 第二章 夢と夢想について

私たちは最早、夢と幻想的創造が運命のお告げとして教えられた時代におりません。人間は、病気の友人とか中傷家とか不実な妻とか戦闘で亡くなった息子の様に、自分の最も奥深い感情と関係していたと思われる夢を、興奮せずに考えられる程変化した訳ではありません。日々の知恵がその様な夢からあなたを守り、そして私を守ることを私は単に願うだけです。しかし、もしもあなたがそれらの夢を見たなら、少しでも信じ過ぎるとあなたを守ってくれるものは何も無いのです。夢に注意するや否や、情熱が本当の原因を考えるのを私たちに思いとどまらせて仕舞うことをそれは理解させてくれます。しかしながら念入りに夢を見詰めなければなりませんし、それは少しは秘密の隠された観念への容易な道になりますし、ここでの私たちの主題の核心でもあります。

私が夢の中に見るのは、各人の感情や思い出の一部です。他に如何なるものを見るのでしょうか。勿論、ありふれた決まり文句に対して私が言うことは、出来る限りそれを少なくして他の原因に注意を向けなければならないことです。第一には、外部の対象物が私たちの感覚に睡眠中でも働きかけることです。それはぼんやりとした緩慢な知覚を与えます。例えば、物音は私たちに触れて関係して来ます。鐘や鈴や人の声が聞こえると意味付けが可能になり、従って間違っても認識されます。匂いも同様です。触覚に関しては、身体の重さや寒暖や服との接触によって、私たちに絶えず考えるものを与えています。そして視覚も又、瞼を通して明るい光によって何ものかを受入れます。火事や血の夢を見た後に、私に起きたことは結局のところ赤いカーテン上の太陽光線が私を目覚めさせたのを認めたことでした。この種の事例なら読者にもおありでしょう。そのことを考えれば十分です。

その他の色々な原因はもっと知られていませんし、私たちの身体と感覚の状態に依存しています。軽い痛み、消化不良、足の血行障害あるいは発熱による血行の促進も又、触覚によって私たちの夢を決定付けますが、まるで何処かの塔とか山頂で寒さや風に晒されていると屢々思っている熱病患者の裡を見ている様です。ぶんぶんいう音やひゅうひゅういう音や衝撃によって血液や呼吸は聴覚にも影響を与えます。同じ原因によって目が刺激されることもあり得ます。兎に角、疲労が目の特異な動揺を残すのは本当です。長く読書をした後や眠る前に、縋や縁飾りの様な輪が動き回って絶えず変化しているのが観察されます。眠る直前になってそれらの形から私は、家々や何人もの人の顔を見るに至ったでしょうか。私は見たと思いました。しかしながら僅かな注意力で私は、何の意味も無い明るかったり暗かったりした斑点に連れ戻りました。夢を見始めるこの種の幻を待ち伏せる者は、これらの出来事に曖昧さだけしか把握しません。私は見ると思うし、見たものを語るでしょう。しかし呪文による様に、その物語が出現させたがる対象は、まさにその瞬間に恐らく対象が欠いているのです。何時も存在するのは一点上であり、何時も世界の縁の上です。それ故に私たちには対象の中にも感覚の中にも全く存在しないものを、私たち自

身に示す力があると軽々しく信じない様にしましょう。

私は第三の種類の原因を強調しますが、それは誤った判断が証拠を最後に自ら与えることを行うものです。もしも私が夢の中で動き回ったなら、そこには触覚としては圧迫や軋轢や衝撃があり、十分に現実的なものです。そして、取分け私の言葉が大きかったり単にぶつぶつ言うだけであっても、聴覚には現実の対象を与えていますし、信じるものになります。ここで私たちは身振りや大袈裟な言葉によって確かに対象を創造するのであり、観念が私たちの広大な主題を支配するでしょう。

夢想においては、諸感覚がその時に屢々ぼんやりとした対象に幻想的な視覚の機会を見出す限り、同一の原因が既に影響を及ぼしているのは明白です。かくして煙と雲と火は、風と泉も又同じ様に、多くの曖昧な知覚によって夢想を大きくします。もっと正確に言うなら活発な知覚は、取分け目はそれらの痕跡を知覚の後に残します。誰もが落日に認めた様に、最初は相次いでイメージが続き、次には補足のイメージになります。或る日の夕方、白い雲の切れ目に薄紫色の円盤が色々な対象の上を長い間走っているのを私は見ました。結局のところ夢想者は大きな声であろうと小さな声であろうと話すことや、多少なりとも目立った動作で真似ることを自ら禁じません。それから特にそれらの動作が眼前に一つの形を描くことがあります。鉛筆はさ迷いながらこれらの動作を定めて、夢想に一つの過去や歴史の様なものを与えます。話をするよりも上手に如何にしてそのデッサンや文字が、結局は私たちの夢を支えているのかを人は認めるのです。(完)

## 執筆者のプロフィール（五十音順）

---

### 出雲 筑三（いずもつくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めつき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

### 高 裕香（こうゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。葉の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

### 宿谷 志郎（しゆくやしろう）

一九四七年東京都青梅市に生まれる。一九七〇年群馬県高崎市に転居。名曲喫茶「あすなろ」（催華国氏経営）を経てデザイン事務所に勤務。群馬交響楽団のPRを担当し演奏会のポスターなどをデザインする。一九七七年広告代理店を設立し医薬品、検査機器の広告をはじめ編集、イベントなどを手がける。トヨタ財団助成の「シビックトラストフォーラム」に参加。まちづくりのための資金づくりについて学ぶ。自治体学会創設に市民の立場で参加。一九八七年東京・青山に編集プロダクションを設立し主に書籍の制作。高村昌憲氏の「パープル」に関わり、一九九九年「風狂の会」に参加。大分県経済誌「アド経」に一年間エッセイを連載。明星大学教授・清宮義博氏の『花々の花粉の形態』などを出版。二〇一二年廃業。一年半の休養後、革工芸（革絵）を始める。二〇一七年より北海道に半年の移住を繰り返し専念。趣味はフルーツ。よく聴く音楽はバッハ、モーツァルトの作品。

### 神宮 清志（じんぐうきよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「落」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

### 高島 りみこ（たかしまりみこ）

一九六〇年高知県生まれ、東京都中野区在住。

日本詩人クラブ、日本現代詩人会会員

詩誌「山脈」「花」同人

詩集『海を飼う』（二〇一八年 待望社 第32回福田正夫賞）

装幀家（高島鯉水子）

究極の趣味はキックボクシング（アマチュア）！最近は試合に出ていないが...

高村 昌憲（たかむらまさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A&E・二〇〇四年）。翻訳『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤忠詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九八年「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年からパプーの電子書籍に、随想集『アランと共に』（全3巻）及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』（全5巻）『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』『精神と情熱とに関する八十一章』などを登録。日本詩人クラブ会員・日本仏学史学会理事

富永 たか子（とみながたかこ）

一九三四年 福岡県柳川市生

日本ペンクラブ・日本現代詩人会・横浜詩人会各会員

「回游」「めびうすの輪」「相模原詩人クラブ」に所属

既刊詩集①『シルクハットをかぶった河童』（第二四回横浜詩人会賞受賞）

②『月が歩く』

詩人北原白秋と同郷。幼児教育に携わり、詩に親しんできた。相模原詩人クラブ主宰。三十五年間詩誌「ひばり野」を年一回発刊し現在に到る。「風狂の会」にて多くを学び席をおく。

長尾 雅樹（ながおまさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事

なべくらますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会・日本詩人クラブ・時調の会各会員

櫛自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつぐら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦 逸雄（みうらいつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

同人誌 風狂 (ふうきょう) 第64号

2019年11月21日 登録

<http://p.booklog.jp/book/128430>

編集：風狂の会 (担当：高村昌憲)

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/128430>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：デザインエッグ株式会社